The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	翻案されたタイ表象 : モームの「九月姫とナイチンゲール」(1922)と光吉夏弥の翻訳(1954)
Author(s)	橋本, 順光
Citation	タイ国日本研究国際シンポジウム論文報告書. 2019, 2018, p. 66-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73335
rights	Copyright © 2019 Chulalongkon University All rights reserved.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

翻案されたタイ表象
—モームの「九月姫とナイチンゲール」(1922)と光吉夏弥の翻訳(1954)—
Thailand as Britain or Japan?: Mitsuyoshi's Translation of Maugham's "Princess September and the Nightingale"

橋本順光　大阪大学

1 英国の作家サマセット・モームとタイ

モームは世界を旅したが、関心と描写の対象は、そこで暮らす欧米人にあった。エジプトのアレクサンドリアからハワイのホノルルまで、港に到着するやホテルで涼み、車でクラブや邸宅に移動しパーティや歓談を楽しんだ後、再びホテルに戻ることを繰り返す。快適ながら、港の外に広がる現地の人々や生活に触れることはないため、各地の印象はどうしても似通ってしまう。このことはモーム自身、紀行文『客室の紳士』(1930)で記しているとおりだ(Maugham, p.7)。もし迷路のようなラングーンの街路に住む現地の人々の中に身を投じたとしたら、どんな「秘密」が聞けるだろうかとモームは自問する(p.8)。しかし、この紀行文や後の小説で彼が皮肉な筆致で描いたのは、故郷を遠く離れて暮らす「客室」の「亡命者」たちであった。

どこも同じで退屈という評言にもかかわらず、今やモームは各地のホテルで広告塔となっている。ペナンのイースタン&オリエンタル、ヤンゴンのストランド、シンガポールのラッフルズ、そしてバンコクのオリエンタル。特に後者のモームの名を冠したスイートは最たるものだろう。この部屋を密会と苦い再会の場所として選ぶことで、日本にその名を知らしめた辻仁成の『サヨナライツカ』(2001)には、「サマセット・モームがかつてこの部屋を愛し、ここに長期間滞在し、この街をモチーフにした幾つかの作品の創作や構想に明け暮れていたのだ」(pp.138-139)とある。「モームが執筆をした机」というように調度品までゆかりがあるかのように記されているが、モームはその部屋でバンコクを舞台にした小説を執筆も構想もしていない。

バンコクに由来するモームの小説は、彼の唯一の童話「九月姫とナイチンゲール」である。本書を収録する『客室の紳士』によれば、1922年の11月、マラリアになったモームは、ホテルのバルコニーで「ここで死んでもらっては困るんで病院に連れてってくださいよ」と医者にこぼす「女支配人」の声を漏れ聞く(p.168)。幸いモームは小康状態となり、酷暑と喧噪のテラスで川向こうの派手な装飾を眺めながら物語を構想したのだという(pp.168-170)。譫妄状態で妄想を膨らませた点で、『阿片常用者の告白』(1821)以来の東洋趣味を踏襲したといえるだろう。

ただし、これはモーム一流の韜晦であった。初出は『ピアソンズ・マガジン』と『グッド・ハウスキーピング』誌1922年12月号であり、11月にタイから送付したのでは到底間に合わない。事実、米国版の後者には「著者後書き」があり、依頼に応じた執筆であることが記されている。つまり「英国女王のためにドールハウスを作ること」が決まり、図書室へ英国の作家たちが作品を寄贈することになったため、その一つとして書かれたというのである。それだけではない。『客室の紳士』を読むと、モームは一人旅をしたかに見えるが、1922年11月から9か月間、タイ、ビルマ、インドシナの旅行の間、ずっと恋人兼秘書のジェラルド・ハクストンがつきそっていた　(Rogal, p.254)。内向的で実務に疎かったモームにとって、社交的な彼の存在は旅に欠かせなかった。再びモームがタイを訪問したのは、ハクストンを亡くして後の1959年12月で、翌月にはチュラーロンコーン大学で誕生日を祝ったという(Maugham, 2002, 解説, 頁数なし)。

僻地で心や体の平衡を懸命に保とうとする人々を冷徹に描いたモームの短編集にはそぐわないためだろう、九月姫の童話は紀行文に組み込まれた。その後、この童話は1939年、1969年、2003年と3度、英語圏で絵本となる。ただ最も好まれたのは日本であった。1954年に「岩波の子どもの本」の一冊として光吉夏弥訳・武井武雄絵で出版された『九月姫とウグイス』は、今なお版を重ねている。作家の江國香織は『絵本を抱えて部屋のすみへ』(1997)で、漫画家の吉野朔実は「モームの絵本、子供の目、大人の目」(『週刊朝日』2007年11月9日号, p.94)で、それぞれ愛読した思い出を語り、再読して大人向けの内容に驚いたことを特記している。吉野と並んで雑誌『ぶ〜け』の黄金時代を築いた松苗あけみは、モームから着想を得た漫画「九月姫最後の冒険」(1984)を描き、イラストレーターの九月姫も、その名はかつての愛読書に由来すると、2018年5月7日0：39にツイートしている。最近でも門川洋子がイラスト「お伽話の娘たち　九月姫とウグイス」を発表しており、こうした根強い人気はおよそ英語圏にはみられない。

2『九月姫とナイチンゲール』にみるナイチンゲール表象と大英帝国博覧会(1924)の文脈

「九月姫とナイチンゲール」は、アンデルセンの童話「ナイチンゲール」(1843)の変奏である。キーツのナイチンゲールやシェリーのヒバリの歌に連なっており、芸術家としての鳥と、支援者である王族との理想的な関係を示す寓話となっている。ただし日本の子供には伝わりにくく、ナイチンゲールでは人名とも勘違いされかねない。最初期にアンデルセンを邦訳した代表例である和田垣謙三・星野久成訳『教育お伽噺』(1910)は「鶯と支那の天子様」と訳しており、光吉はこうした前例にならってナイチンゲールをウグイスへと変更したと思われる[1]。

アンデルセンのナイチンゲールの舞台は中国である。皇帝は庭園を散策するうちにナイチンゲールの歌に心を奪われるが、ある日、日本の皇帝から機械仕掛けのナイチンゲールを贈られて心変わりしてしまう[2]。ナイチンゲールは悲しむが、機械の鳥は故障してしまい、歌を聞けなくなった皇帝は病気になる。すると見かねたナイチンゲールが、再び病床の皇帝のために歌を歌い、皇帝は無事に平癒する。芸術の支援をめぐるパトロンや社会の身勝手さと、しかし、最後にはそれに救われる芸術の力を強調した物語なのは明らかだろう。

風刺と皮肉を交えつつも、モームも同じ主題を引き継いでいる。まず姫の命名をめぐる混乱が挙げられる。最初と2番目の姫は「昼」と「夜」と名付けられるが、3人目以降も生まれたため変更して「春」「夏」「秋」「冬」へと改名される。しかし、さらに王女が生まれたので王は頭を抱え、「一月」から「九月」へと変更することに決める。しかし、もしさらに4人の娘が生まれると、この命名もご破算になってしまう。そこで王は、その場合は王妃を処刑しなければならないと泣き始めるのである。およそ人知の及ばない息女の誕生と数に対し、秩序を貫徹しようと思い悩む王の姿は、主人公である九月姫の成長と諦観への見事な導入となっていよう。そして、王の身勝手な命名変更の被害者というべきか、名前が何度も変わってひねくれてしまった姉は、最初から九月と名付けられたため素直に育った九月姫と対比されるのである。

転機は王が王女に送ったオウムであった。彼女らはオウムに国歌の「王様万歳」(God Save the King)と英国民謡の「かわいいポリー」(Pretty Polly)を教え、この歌をオウムは7カ国語で歌えるようになる。しかし、ある日、九月姫のオウムは死んでしまう。消沈する九月姫は、たまたま耳にしたナイチンゲールの歌声に魅了される。文字通りオウム返しに王を讃える歌しか歌えないオウムの阿諛追従と違い、外の世界から聞き集めたナイチンゲールの歌はまさしく「芸術家」のものだった。九月姫のところに飛んできて歌を捧げるナイチンゲールに、姉たちは当

然のことながら嫉妬し、好きな時に聞けるからと鳥籠に閉じ込めるよう九月姫をそそのかす。しかし、閉じ込められたナイチンゲールは、以前のように歌を歌えなくなり、病に伏す。それを見て後悔した九月姫は、泣く泣くナイチンゲールを外に放すことを決める。自由に飛び回れるようになったナイチンゲールは、再び九月姫に歌を捧げ、ちょうど放生や放鳥の功徳のように、その歌を聞いた九月姫は美しく成長する。こうして九月姫はカンボジア王へと嫁ぎ、オウムの歌を聞くばかりで醜く育った姉たちは、厄介払いのように家臣へと嫁に出されてしまう。

歌が聞けなくなって床に臥すアンデルセンの皇帝と異なり、モームの場合、病に倒れるのは、閉じこめられて機械のように歌を強いられたナイチンゲールの方である。そして非を悟った王女はナイチンゲールの歌を聞いて美しく育つ一方、8人の姉は顔も心もいびつに育つ。支援の見返りのように諂いばかり求める王族を手ひどく風刺した物語を、モームは王室に捧げたことになる。しかも、このドールズハウスは単なる王室への献上だけではなかった。1924年4月にロンドン郊外のウェンブリーで開催された大英帝国博覧会にて、王室の威信をかけ、えりすぐりの人材と材料が集められたメアリ女王のドールズハウスで展示されたのである。国力の低下に伴って低下した帝国意識を涵養し、植民地との紐帯を強固にすべく企画された帝国博覧会で、このドールズハウスは英国の雛形として作られ、その図書室は英国作家の殿堂となっていた。モームは、1インチほどの本に九月姫の童話全文を自ら筆写し(Rogal, p.223)、これらの豆本は『女王のドールズハウス文庫』(*The Book of the Queen's dolls' House Library*, 1924) という豪華本としても刊行された。バーナード・ショウはいかにも彼らしく献納を謝絶したが(Duff, p.183)、『客室の紳士』で冷徹に描いたように、1922年の旅で英国の影響力の低下を目のあたりにしていた元諜報員のモームは面従腹背を貫いた。背表紙では国威発揚の義務を果たしつつも、芸術家は権力と距離を置いてこそ幸福な関係を築けるという、諫言にも似た物語を贈ったのである。

王族へ献呈した書物にタイを選んだのは、異国を舞台にした方が英国を巧みに風刺できるからだろう。タイを描きながら英国を示唆する手法は、1939年版のリチャード・C・ジョーンズの描く絵本でも踏襲されている。表紙にはワット・ベンチャマボピット（大理石寺院）あたりのシンハーを思わせる一対の獅子像が鎮座し、ほかにもワット・アルンに似た建物も登場する。ただし、シンハーは実際と違い、横向きに向かい合って描かれ、獅子の姿が強調されている。ここで第二次大戦中にビルマで結成された対日本特殊部隊を思い起こしてもよいだろう。ビルマのチンテーにちなみ、チンディット(Chindits)と愛称された彼らのマークもまた横向きに描かれた獅子であり、そこには英国の象徴であるライオンが重ねられていた（なお大英帝国博覧会の公式マークも横向きに描かれたライオンである）。ビルマの寺を守る獅子＝チンテーに、ビルマを守るライオン＝英国が重ねられたわけである。九月姫に登場するタイや王室もまた、それらしく描かれつつも、同じく英国が重ねられていることは明白といえるだろう[3]。

3『九月姫とウグイス』にみる光吉の訳文と武井の挿絵の相乗効果

邦訳の『九月姫とウグイス』は、おそらく1939年の絵本を底本にしていると思われるが、武井による挿絵は、独自の資料に基づいて描かれている。大理石寺院とワット・プラケオ（エメラルド寺院）とを並べて描いた一枚はその一例である(モーム, 頁数なし)。戦前の光吉は舞踏評論家として知られ、その洋書は「西欧文化の資料庫」(尾崎, p.341)として知られていたので、武井は光吉から資料を提供されたのではないか。例えば姉の姫たちを半裸で描いた武井の挿絵は、日本で人気だったバリの踊り子を思わせ、王の描写には、光吉の「南の踊り」(1942)にあ

るカンボジアの写真と類似しているものがある。この記事の中で光吉は、ピエール・ロティのインドシナ紀行に言及しつつ、時局柄、東洋の一体性を強調していた[4]。武井の挿絵がタイ固有の文脈に無関心な点にも、戦前の南洋観からの連続性を読み取ることは可能だろう。

実際、1942年頃から翻訳を始めた光吉の児童文学は、戦後に継承されていた。1943年7月号『学鐙』に寄稿した「踊と民族と本」によれば、舞踏が「なぜとはなしに疎遠」になる一方、「書架には、ようやく千冊を超えた各国の児童書が氾濫」してきたと述べ、事実、光吉はその年にクルト・ヴィーゼの画文集(1942)を『龍王の珠』と題して刊行する。書中の「五人の不思議な兄弟」は、後に石井桃子が訳した「シナの五にんのきょうだい」(1961)の原著である。当初、光吉は岩波で訳せないかと石井に資料を提供し、石井は反対したにもかかわらず、後には石井自身が福音館から翻訳したのだった(尾崎, pp.369-70)。光吉は『ちびくろ・さんぼ』(1953)の翻訳者なので、彼は異国を舞台にしたこれら3つの童話すべてに関わっていたことになる。

九月姫について、光吉は『白鳥の湖』(1951)の後書きで翻訳が必要な児童書の一つとして言及しており、1939年版の絵本を念頭に自身が翻訳を企画したと思われる。本書を収める「岩波の子どもの本」は1953年から始まり、光吉は石井桃子と共に中心的な役割を果たした。多くがロングセラーとなったこの画期的な叢書は、サンフランシスコ講和条約が発効し、主権が回復した翌年から刊行された。リーフ の『みんなの世界』(1953)やケストナーの『どうぶつ会議』(1954)など、光吉訳のいずれもが民主主義を平易に教える内容なのは偶然ではあるまい。そもそも光吉が敗戦後に初めて刊行した児童書『大統領の人形たち』(1946)や進士益太との共訳『エブラハム・リンカーン』(1950)は、占領下を濃厚に反映している。岩波の同叢書での光吉訳『ナマリの兵隊・長ぐつをはいたネコ』(1954) は、踊り子と心中する片足の兵士と、猫の機知を借りて出世する一文無しの末っ子の物語であり、戦争の惨禍と混乱の中から才覚で成功する物語と要約できる。機関車の引退に象徴される旧時代の終焉を描く阿川弘之 の『きかんしゃやえもん』(1959)や、都会化の中で残り続けるバートンの『ちいさいおうち』(1954)のように、伝統と進歩の調和や民主主義など新時代の価値観の強調は、同叢書全体に共通していた。

同叢書の中心は英米の翻訳だったが、日本の作家や画家の貢献も看過できない。初山滋や武井など戦前の『コドモノクニ』を代表する画家の積極的な登用や、原著よりも巧みに文と絵を同期させたレイアウトは、その最たる例である。事実、武井の挿絵は、例えば『コドモノクニ』1922年7月号の「ジドウシャ」のように、読者が作中人物と光景を共有する一種の画中画を援用し、原作にはない事物も積極的に描き入れている。青い直線の毛糸に囲い込まれた兄たちと自ら青の毛糸を手繰る九月姫との対比や、似通った線表現の方向を変えることで籠の鳥と飛んで行く綿毛とを対照する挿絵は、原作以上に作品の主題を可視化している。特に巧みなのは原作以上に8の意味に注目し、8人の姉を描く場面で「∞」の図を複数描き入れ、その自己愛と嫉妬の悪循環を示唆するところであろう。武井が目にしたかもしれないジョーンズの挿絵は、文中に絵を描くことで漢字風の異国情緒を演出するくらいで、およそ物語を補助する挿絵の域を出ない。大胆な武井の描き込みが、本書を原作以上に有名にしたのはまず疑いあるまい。

もちろん光吉の達意の翻訳も無視できない。基本的に光吉は原文を忠実に訳しているが、「かわいいポリー」についてのみ、「かわいいオウム」と大胆に意訳している。オウムは「王さま、ばんざい」というお世辞と「かわいいオウム」という自惚れの歌を繰り返すのみという点で、自画自賛が強調されているのである。一方、自由に窓を出入りするナイチンゲールから美しい歌を聞いたため九月姫は美しく成長したという場面で、武井は蝋燭の下で読書する姫を

描いている。原文にも訳文にも読書には言及がなく、姉たちが本を読む姿もまったく描かれない。いわばオウム返しに歌ばかり聞いた姉と、ナイチンゲールの歌を耳にしながら読書した九月姫とが対比されていることになる。ここに画中画ならぬ読者の似姿としての九月姫を読み込むことは不可能ではあるまい。光吉は主権回復まもない1954年に、読者という九月姫に対して童話の語り手としてのナイチンゲールという見立てで、モームの物語を移入したといえる。そんな光吉とあたかも共鳴するように、武井もまた本書のような自由な精神の下で編まれた物語によって、読者たちが身も心も美しく育つよう祈念して挿絵を寄せたといえるかもしれない。

吉野はじめ、この童話を再読した大人は、姫がオウムを逃がして泣き伏す場面と、自分の幸せよりも自分が愛する人の幸せを考える方が難しいという警句に注目することが多い。姫（の名）を「籠の鳥」のように支配する王から、オウムを籠に閉じ込める姫たちという負の連鎖を断ち切り、愛するからこそ相手を解き放つ場面は、モーム自身のセクシュアリティの反映だけにとどまるまい。鳥を放つことが、鳥籠に縛られていた女性の解放をも示唆しているからである（一方、家臣へと降嫁される姉は、今度は下賜されたシャム猫を閉じ込めることが末尾で示唆されている）。事実、共依存からの解放という主題は、九人の姫がみな結婚する松苗あけみの「九月姫最後の冒険」や、文字通り、鳥籠に長い髪が縛りつけられた門川洋子のイラストにも継承されており、これは実のところ『サヨナライツカ』とも通底しているのである[5]。

＜参考文献＞

尾崎真理子(2014)『ひみつの王国　評伝石井桃子』新潮社

辻仁成(2001)『サヨナライツカ』世界文化社

光吉夏弥(1942)「南の踊り」『サンデー毎日』1942年6月14日号

モーム、光吉夏弥訳・武井武雄絵(1954)「九月姫とウグイス」岩波書店

Duff, David. (1985). *Queen Mary*. London: Collins.

Maugham, W. Somerset. (1930). *Gentleman in the Parlour*. London: William Heinemann.

Maugham, W. Somerset. (2002). *Siamese Fairy Tale*. Bangkok: Orchid Press.

Rogal, Samuel J. (1997). *A William Somerset Maugham Encyclopedia*. Westport: Greenwood.

---

[1] 和田垣らは英訳 *Stories for the Household* (1889)を参照したらしく挿絵もそのまま転写している。

[2] 偶然にも日本の韓志和伝説を思わせる設定だが、18 世紀から 19 世紀にかけてオルゴールや機械人形が仕掛けられた豪華な時計を皇帝に贈って喜ばせたのは、ヨーロッパ列強である。

[3] こうしたタイ表象の往還と転移については、橋本 順光(2014)「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用－「孔雀貝」と「火の鳥」－」『日本研究論集』10 を参照。

[4] 光吉は「南の踊り」で「東洋舞踊の性格」を「静」とし(p.30)、東宝の『演劇年鑑』(1943)所収「南方圏の芸能」では「古代舞踊」が今なお息づくのは東洋のみと強調している(pp.161-162)。

[5] 映画にはオリエンタルホテルのロビーで鳥籠を模した照明を映す場面があり、同時期の『恋するために生まれた』(2001)で、辻は江國に「鳥籠とカナリア」という寓話を書き送っている。